

「4人の漁師の召命」

マルコによる福音書1章16～20節

ポイント

1. 弟子の召命
2. 弟子が練り上げられる期間
3. 主の働き人として恐れなく福音宣教へと歩み出す

おはようございます。8月22日の礼拝メッセージさせていただきます。礼拝メッセージは初めてですので、緊張して言葉がいいよどんだりすることもあると思いますが、どうぞ、聞き上手になって、神学校を卒業したばかりのわたしのメッセージをお聞きください。

今日の聖書の箇所はマルコによる福音書1章16節～20節です。聖書をお読みします。「16. イエスはガリラヤ湖のほとりをあるいておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師だった。17. イエスは、「私について来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。20. 二人はすぐに網を捨てて従った。19. また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが舟の中で網の手入れをしているのをご覧になると、20. すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。」

シモンとアンデレはイエス様に、「私について来なさい。人間をとる漁師にしよう。」と言われると、二人は即座に網をすててイエス様に従います。

また、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネもイエス様がその二人をお呼びになると、すぐに従います。

お聞きくださっている皆様はイエス様を信じている方々がほとんどですので、救い主イエス様の導きならば、ペテロ達は素直に従うであろうと思ひ、また、そうできるペテロ達は素晴らしいと思ひのことと思ひます。私もそう思っていました。

しかし、ガリラヤで伝道を始めたばかりのイエス様に従うのに不安はなかったのでしょうか。そのあたりがとても不思議な気がします。

私が召命を受けたのが大学一年の春休みでしたので、まだまだ、若く、いわゆる世間の波風も知らず、なんの経験もない若い学生でした。ですから、この箇所の4人の召命は特別な人の召命であると長く思ってきました。

共観福音書では、バプテスマのヨハネの二人の弟子については書かれていませんが、ヨハネによる福音書には二人の弟子について書かれています。開かなくても結構ですので、ヨハネによる福音書1章35節から37節をお読みします。

「35. その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。36. そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の子羊だ」と言った。37. 二人の弟子はそれを聞いて、イエスに

従った。」

ヨハネの二人の弟子は、ヨハネの「神の子羊」という言葉に反応して、ヨハネを置いて、イエス様についていきました。

この「神の子羊」とはどういう意味なのでしょう。ヨハネの福音書 1 章 29 節にヨハネはイエス様のことを「世の罪を取り除く神の子羊」と言っています。

ユダヤ人にとって、罪を赦してもらうためには、常に神殿にいけにえとして子羊を捧げることが重要でした。

ヨハネはイエス様を「神の子羊」と呼びました。イザヤ書 53 章にはメシア予言が書かれています。そして、その 10 節に「彼は自らをつぐないの献げ物とした。」とあります。イエス様は神が備えられた、子羊だとヨハネは言っているのです。それを聞いたヨハネの弟子たちは、もっと、イエス様からいろんなことを聞きたいと願ったのでしょう。イエス様の泊っている宿に泊まり、どれほどの話をイエス様からお聞きしたのかと思います。

二人の弟子の一人はアンデレですが、イエス様に出会えたことがうれしくて、兄弟であるペテロにイエス様のことをメシアに出会ったと話しています。

さて、マルコによる福音書 1 章 16 節に戻りますが、すでにヨハネの弟子であった時にアンデレはイエス様と出会っており、ペテロはアンデレからメシアに出会った事を聞かされていきました。まさにその方に「ついて来なさい」と言われたのです。

また、バプテスマのヨハネのもう一人の弟子はヨハネだと言われていますが、ヤコブとヨハネもイエス様の召しに従っています。父と舟を残しての献身でした。

なぜ、すべてを捨てて、従えたのでしょうか。私が召命を受けたときは、先ほどもいいましたが、大学一年の春休みでした。その時、エレミヤ書 18 章 6 節の「イスラエルの家よ、この陶工がしたように、私もお前たちになしえないというのか、と主は言われる。見よ、粘土が陶工の手の中にあるように、イスラエルの家よ、お前たちはわたしの手の中にある。」という御言葉を頂きました。

この御言葉が与えられたとき、本当にうれしく、神学校に入学、そして、福音宣教の道を行くと思うと嬉しさに胸が躍るようでした。私は母教会の牧師から「大学を卒業してから神学校に入るのがいいと思うので、大学の休みごとに奉仕をしてください」と言われ、休みごとの奉仕は楽しかったです。そして、イエス様のために働くという喜びは新鮮で海外でも国内でもどんな環境でも働ける、宣教の喜びはいやまずという感じでした。

しかし、卒業までの 3 年の間に世界や日本の経済状況が変わっていきました。そして、私自身の心境にも変化がありました。私は大学時代、教会のそばのアパートに住んでいました。ですから、学生時代は牧師館に入り浸っていたような印象があります。入り浸っていた私がいうのも変なのですが、牧師家族にプライベートな時間はあるのだろうかと思ったのです。牧師の趣味はなんだろう、牧師夫人の趣味って聞いたことがない。そんな事を思い、始終誰かが入り浸る、そんな生活に私も将来なるのだろうかと思ったのです。

そして、もう一つは経済的な事でした。神学校卒業後、どんな教会に遣わされるのだろうか。ちゃんと生活できるだけの謝儀はもらえるのだろうか。民間なら初任給はこれだけもらえる。そんな事を思うようになりました。大学 1 年の頃の召命の喜びと働きへの熱意がいつの

間にか、人間的な思いに支配されるようになっていました

しかし、神様は長い年月忍耐して待ってくださっていました。そして 20 年近く前から私の中に一つの祈りが起こってきました。それは、これからもこのいわゆる「恵まれた生活」が続くと思える中で、「どのように私は直接献身の道へ導かれるのでしょうか。」というものでした。家族には話せない祈りでした。自分でも不可能ではないかと思いつつも神様からの召しに従いたいという渴望が大きくなってきたのです。未信者の家族、親族はどれほどの衝撃を受けるかを思うと、神様にすべてをゆだねる事しかできませんでした。神様にゆだねられることは恵みでした。

今、改めて、このエレミヤ書を読んでもいろいろに気が付きました。陶工は粘土で器を作りますが、その粘土をろくろに載せるまでの陶工の仕事はとても重要なのです。良い粘土を土の中から切り出します。そして、練って練って、その中に混じっている小石やごみを取り除きます。それが終わっても、まだまだ、練り続け、空気を完全に抜き、程よい柔らかさになるまで練って、良い器になる粘土に仕上げていきます。よく練られた粘土はろくろの上でどんな形にも陶器師の思いのままに形づくられます。

私の召命を受けて以来の年月は切りだしたばかりの粘土であったのを陶器師が小石やごみを取り除き、空気を抜き、練り上げて焼き物にかなう粘土を作り出す年月だったように思います。そして、今、ろくろの上に載せられて陶器師の思うままの形にしあげてもらおうとしています。

さて、この 4 人の漁師たちはイエス様から召命を受けるとき、まさに呼応するがごとく、すべてを置いて従いました。漁師に必要な網を置き、大切な父や財産である舟を置いて従いました。それは、自分の手の中にある何物も、無価値に思い、そこに置くことができ、ただ、イエス様に従い、宣教の働きに進んでいます。

しかし、ペテロ達は「神の子羊」の意味を解していたのでしょうか。罪のあがないのためにいらしたイエス様ではなく、メシアとしてのイエス様の登場を喜んでいたのでした。

ペテロ達弟子にとってイエス様が伝道に入れ、十字架につけられるまでの 3 年半という年月は、まさに陶器師が粘土を練り上げ、不純物を取り去り、どんなものにも作り上げられる粘土になるための大切な年月だったのでした。

イエス様と共にいた年月はイエス様に頼った年月でした。そして、ゲッセマネでの祈りの時、また、イエス様がピラトに尋問を受けている時、弟子たちは皆、意味を解しきれず、逃げまどっていました。

しかし、練り上げられた一人一人は、イエス様の昇天の後、死も恐れぬ弟子に変わり、福音宣教への道を歩む者へとかえられていきました。

私たちは、自分では気が付かなくても、神様は一人一人にそれぞれの形で万全な用意をしてくださり、神様の働きに携わらせてくださっています。それは、直接献身ばかりでなく、教会での働き、世にある働き、さまざまな形で、その人に一番あった働きをさせてくださっています。

ペテロ達は「イエス様が召してくださった」と言った具体的な召しにより、働き始めました。

しかし、私たちはイエス様を見る事は今はできません。しかし、聖霊が共にいてくださいます。聖霊の導きによって、今日も明日も、私たちはイエス様とのそれぞれの出会いに感謝し、この地上にある限り、主と共に歩んで行きたいと思えます。